特別記事

Interview

新音楽監督ジャナンドレア・ノセダ、チューリヒ歌劇場の初年のシーズンを語る

秋の新シーズンから就任

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

世界の名門オペラ座で新総裁や音楽監督の交代があいついでいるが、スイスのチューリヒ歌劇場もこの秋からジャナンドレア・ノセダが新音楽監督に就任する。ノセダといえば、マリインスキー歌劇場のイメージがいまだに強いが、そのノセダが、先鋭的でもあり保守的でもあるチューリヒ歌劇場の音楽をどのように導いていくのであろうか。

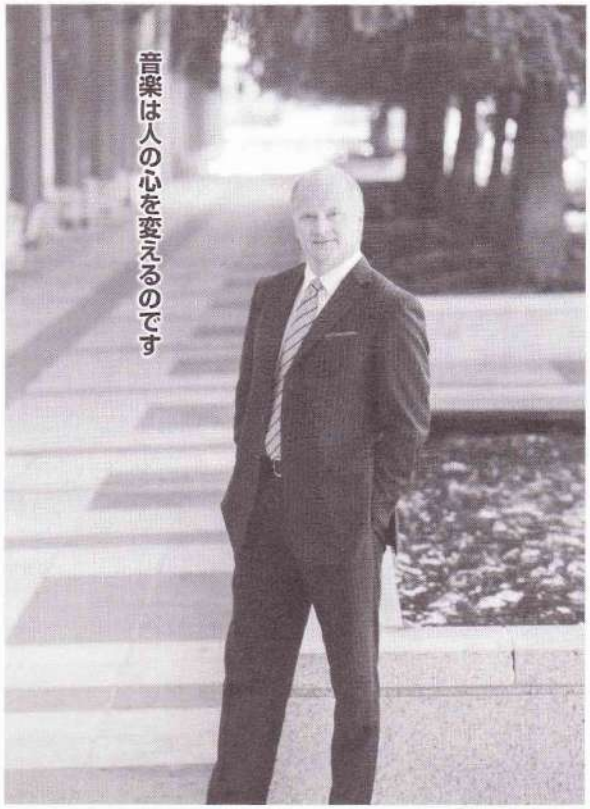
Gianandrea Noseda, new music director of Opernhause Zürich, speaks about new seasons programme

《ニーベルングの指環》にも挑戦

チューリヒ歌劇場の2021／22年の新シーズンプログラムが発表された5月17日、次期音楽総監督のジャナンドレア・ノセダに抱負を語ってもらった。

――音楽総監督を引き受けた理由はなんでしょうか。

「この歌劇場で上演されたDVDはR・シュトラウス《ナクソス島のアリアドネ》、ブリテン《ピーター・グライムズ》、アーノンクール指揮のヴェルディ《アイーダ》等いくつも持っており、国際的レヴェルの歌劇場だと知ってはいましたが、直接のターニング・ポイントは3年前のプロコフィエフ《炎の天使》を振ったときです。オーケストラも合唱も劇場としても、すべてがハイレヴェルで、満足感が得られました。次にワーグナー《ニーベルングの指環》です。全編の指揮は未経験で、「いま挑戦しなければ、いつ?」と思っていたところでしたので、アンドレアス・ホモキ総裁演出でのオファーは魅力的でした。ダンテの『神曲』にも似ているこの大作を、子供が目を輝かせておもちゃ屋さんを探索するように、ホモキ氏と深く探っていきたいと2022年4月を楽しみにしています。ほかにも同年6月のワーグナー《トリスタンとイゾルデ》ではカミッラ・ニールンドを起用します。コンサートのほうはドヴォルジャーク、プロコフィエフ、チャイコフスキー等、スラヴ音楽が主軸となりますが、ドイツ・ロマン派では、ダニエル・トリフォノフが弾くブラームス『ピアノ協奏曲第1番』やブルックナー『交響曲第9番』を組みました。それらの音楽によってこの歌劇場に導かれたように思います」



©Tracey Salazar
サンクトペテルブルクのマリインスキー劇場で磨いたその手腕を、チューリヒではどのように発揮するだろうか

ジャナンドレア・ノセダ
1964年生まれ、イタリア・ミラノ出身。カダックの指揮者コンクールに入賞。マリインスキー劇場、ワシントン・ナショナル交響楽団、ロンドン交響楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、RAI国立交響楽団の、カダケス管弦楽団、BBCフィルハーモニック、イタリアのストレーザ音楽祭等のシェフや首席客演指揮者を歴任。イタリアの芸術界に対する貢献により、イタリア共和国功労勲章《カヴァリエーレ・ウッフィチャーレ》を授与。2021-22シーズンからチューリヒ歌劇場の音楽総監督に就任予定。

導かれたキャリア

――いままでのキャリアも導かれた感じですか。

「はい。家にたまたまピアノがあったので、小さなころから鍵盤を押して、そのうち和音を探したりしていました。父がアマチュア合唱団員だったので、5歳のころからヴェルディ《アイーダ》やヴェルディ『レクイエム』、マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》、ヴェルディ《仮面舞踏会》などの公演に父を訪ねて行きました。音楽家になると決めたわけではなく、自然とブルーノ・カミーノ先生についてピアノ科を卒業し、フランコ・ドナトーニ先生と作曲も勉強しました。21、22歳のころは音楽の先生として身を立て、コレペティトゥーアもしながら、26歳のころ指揮も始めたのです。1994年に優勝した二つのコンクール、とくにカダケス国際指揮コンクールでは、スペインで18ものコンサートを振らせてもらえたのが良い勉強になりました。指導を仰いでいたドナート・レンツェッティ先生に勧められたアカデミア・キジャーナ・ディ・シエナのマスターコースでヴァレリー・ゲルギエフと会い、1997年にはマリインスキー劇場の首席指揮者に就任したのです。

――トリノ王立歌劇場での成功など、その秘訣はなんですか。

「音楽は人の心を変えます。そうやってパッションを持ち続けて周りを引っ張るのです。パッションを失いかけたら、教えるのがいちばんです。小学生が目を輝かせて学ぶ姿はモティヴェイションを上げてくれます。1月19日、この歌劇場で初めてオーケストラ・コンサートを行い、2月にはブラームス『レクイエム』で合唱団とも信頼関係を築くことができたので、これから始まる物語に期待を抱いています」